



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『経済学批判綱要』における「生産一般」についての考察
Author(s)	石垣, 博美
Citation	北海道大學 經濟學研究, 16, 1-27
Issue Date	1959
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31059
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_P1-27.pdf



『経済学批判綱要』における「生産一般」 についての考察

石 垣 博 美

周知のようにマルクスは、一八五九年一月『経済学批判』の序言において、有名な経済学体系のプランをのべたあとに、つぎのような章句をつけ加えている。

「*ちつと書きおえた一般的序説 (eine allgemeine Einleitung) を、わたくしはさしひかえることにする。というのは、よく考えてみると、これから証明していこうとする諸結論 (erst zu beweisender Resultate) をさき廻りしてのべるようなことは何でも邪魔になるように思われるし、それに、いやしくもわたくしについてこようとすると読者は、個別的なものから一般的なものへとよじのぼつてゆく覚悟をきめなければならないからである。⁽¹⁾*」

編集者の指示をまつまでもなく、ここで一般的序説といわれているものが、『経済学批判綱要 (1857-1858)』の冒頭におさめられている『序説』(A. Einleitung)をいみしていることは、疑いなくところであろう。⁽²⁾だが、それが『序説』の全体をさしているのか、それとも『序説』の一部分を事実上いみしているのかは、必ずしも明らかではない。けだし、『序説』は形式的にみても四つの節にわかたれており、しかも内容上はそれぞれの節に応じてかなり異質的な

『経済学批判綱要』における「生産一般」についての考察 石垣

主題をとり扱っているように思われるからである。しかしこの点の分析はのちにゆずるとして、ともかくここでは、マルクスがこの『序説』をこれから証明しようとする諸結論だとしていること、しかもその諸結論たるや一般的なもののみし、個別的なものから順を追って証明されるべきものだとしていることに、そしてそれゆえに結論をさき廻りしてのべることは展開のさまたげとなるから、その発表をさしひかえたということに、注意の眼を向けたい。もちろん、マルクスがその当時、はたしてこの『序説』をば、少なくともその大綱において、一般的序説として完全な展開をなしたものとみなしていたかどうかということには、疑問の余地があるかもしれないが、しかしそれがその発表を断念したということは、動かしがたい事実である。この点に、マルクスにおける方法論上のきわめて重要な問題がひそんでいることは、すでに指摘されているところである。本稿ではマルクスが右の章句であげている『序説』省略の理由やその意義について、『綱要』の敘述にそくしつつ、いますこしたちいつた内容的な検討を加えたいともう。

- (1) Marx, "Kritik der Politischen Oekonomie", besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, 1934, S. 3 訳書、岩波文庫版、一一ページ。

- (2) 『経済学批判』の序言では、この章句のあとで、マルクスは有名な唯物史観の公式をかかげている。そしてその導入部に、『わたくしにとつてあきらかになり、そしてひとたびこれをえてからは、わたくしの研究にとつて導きの糸として役立つ一般的な結論(das allgemeine Resultat)はかんたんにつぎのように公式化することができる。』(Kritik, S. 5 訳書、一三ページ)とあるが、ここでの一般的結論といっているものは、もちろんさきの『序説』をそのままいみするものでもないし、またその要約でもない。むしろ『序説』の一部としてふくまれるものを、定式化したものではないかとおもう。宇野弘藏教授記念論集『マルクス経済学体系』上巻、所収、拙稿、一一九ページ参照。

- (3) 宇野弘藏教授は、かねてからここでの省略の意義をきわめて高く評価し、『序説』で展開された経済学的方法的見地は、必ずしもそのまま『資本論』の理論的展開を律すべきものではないとなし、『資本論』の方法は『資本論』じしんの展開から学ぶべきだとする立場を強調しておられる。『価値論の研究』五ページ) 宇野教授は、『序説』の第三節『経済学の方法』を主として問

題としているのであるが、本稿では、むしろ他の諸節を中心に、この省略の意義にふれたいとおもう。他の諸節もまた省略されている点では、同様の扱いをうけているからである。

二

ところで、『綱要』の範囲内では、すくなくともマルクスがかような省略の考えにたちいたつていないということを、裏付ける諸章句が散見される。というのは、後述に詳しくみるように「生産一般」なるものを論述の冒頭に定置すべきだとする提言が、しばしばあらわれてきて、『序説』での一般的諸命題を『綱要』の本論においてもとり扱つていこうとする趣旨が、うかがわれるからである。⁽¹⁾ いなむしろ、『綱要』では『序説』は、まさに本論の序説たる意義を十分にあたえられていたと考えなければならぬであろう。したがってそこにおいては、『序説』の意義は、『綱要』じしんの敘述内容と十分に関連させつつ吟味されなければならないのである。そうだとすれば、われわれはここに結論的にいつて、つぎのような一応の仮設をたてることができるのではないだろうか。すなわち、『綱要』を記述しているうちにマルクスはこの省略に従わざるをえない理由に直面したのではないかということ、いいかえると、当初においてマルクスは『序説』をば、まさに本論にたいする序説として論述したのであるが、『綱要』本論の展開のうえでその意義を再検討しつつ、ついにその発表を断念したのではないかということ、これである。以下では、こういうかたちでのプラン変更の経緯を、『綱要』にふくまれるノートの執筆順序に應じてできるかぎり明らかにしたいとおもう。

(1) 後述の一〇ページ以下参照。

まず『序説』の第一節「生産」および第二節「生産、分配、交換および消費の一般的関係」⁽¹⁾についてみると、そこでは、大雑把にいつて生産を中心として分配、交換および消費などの概念上の関連が、きわめて一般的かつ抽象的に

論ぜられており、同時に従来^{（1）}の経済がこれらのものをどういう立場からとり扱ってきたかという点にたいする方法的な批判が展開されていること、これはだれしも否定しえないところだろう。この点をいまずこし詳しくみれば、第一節では、まず「社会的な個人の生産」を前提として「生産一般」という「ひとつの合理的抽象」の成りたつ所以が説明され、その結論として「生産一般」が「一般的生産」、「特定の生産諸部門」、「生産の総体」などにたいしてもつ関係についてのかんたんな指摘がなされている。そしてそのあとで従来^{（2）}の経済学で流行している「総論」』『生産論』にたいする内容的検討が加えられているが、第一節全体のむすびとしてはつぎのようにのべられている。「要約するところなる。すべての生産段階には、共通の諸規定があり、それらは、思考によつて一般的なものとして固定される。しかもいわゆるすべての生産の一般的条件とは、こうした抽象的な要因にほかならないのであつて、それによつては現実の歴史的な生産段階のどれひとつをも理解することはできない^{（3）}」と。

つぎに第二節では、マルクスはその冒頭に「生産のもつとすんだ分析にはいつてゆくまゝに、経済学者たちが生産とならべて挙げているさまざまな項目に注意をほらう必要がある」（傍点筆者）と記したあと、生産にたいする分配交換、消費などの相互的な関連を順次に分析説明し、そしてその結論としてはつぎのよういつている。「われわれが到達した結果は、生産、分配、交換、消費が同一だということではなくて、それらが一個の総体の全肢節を、ひとつの統一の内部での区別を、なしているということである。生産は、生産の対立的規定における自分を包摂しているのと同様に、ほかの諸要因をも包摂している。過程はつねに新しく生産からはじまる。交換と消費とが包摂者になることができないことは、おのずからあきらかである。生産物の分配としての分配についても同じことがいえる。しかし生産諸要素の分配としては、分配は、それじしん生産のひとつの要因である。だからある一定の生産は、一定の消費、分配、交換を、これらのさまざまな諸要因同志の一定の関係を、規定する^{（3）}」。

このようにみても、この二つの節において主張されている諸点を要約すれば、それはむしろ、スミスやリカードオのような古典経済学者はもとより、バスティア、ケアリ、プルドンおよびJ・S・ミルのような俗流経済学者をもふくめて、従来の「経済学者たち」が経済学の「出発点」としているところの、「たんなる個人の生産」とか「生産論」とかにたいする批評をつうじて、抽象的・一般なかたちでの生産、分配、交換、消費などの諸概念の設定があたえられている、ということになるであろう。そしてこのばあいとくに注目される点は、マルクスが一方では、「生産一般」にかんしてみられるように思惟による抽象的・一般的規定は可能であるにしても、それによつては特殊的な生産段階はすこしも理解しえないのであるとして、いわゆる「総論」としての「生産論」に否定的な態度を示しながら、他方では、生産概念を基礎とする経済的な主要諸概念の一般的関連を、かなり積極的に設定しようとする意図がよみとられること、これである。

- (1) 『綱要』では、第一節「生産」のまえに「一、生産、消費、分配、交換(流通)」という表題がかかげられているが、これにたいして「二」にあたるものは事実上みあたらない。しかし内容的にみると、右の「一、生産、消費、分配、交換(流通)」という表題のふくむ範囲は、第一節の「生産」と第二節「分配、交換、消費にたいする生産の一般的関係」とだけにかぎられ、第三節以下はふくまないとみるべきだろう。これは、第二節の末尾の近くに、「C₁さいごに交換と流通」とあることから明らかだろう。したがつてこの両節は、右の表題のもとにひとまとめにしてとり扱うことができるのである。
- (2) Marx, "Grundrisse der Kritik der Politischen Oekonomie", Rohentwurf 1857-1858, S. 10.
- (3) Grundrisse, S. 20.

さて右にみたように、はたしてマルクスがこの両節において従来の経済学にひろく採用されていた方法意識の批判をとおして、多少とも積極的に生産一般を基軸とする生産有機体の諸肢節間の関連を設定すべく試みたものとするならば、それは第三節の「経済学の方法」にたいしてどのような関連をもつものであろうか。⁽¹⁾ 一般に、第三節の「経済

学の方法においてはマルクスの経済学におけるいわゆる「理論的方法」がとかれていることは、周知の事実であつてこのことは詳論を要しないところである。すなわち、出発点としてのもつとも単純なカテゴリーから、しだいに複雑なカテゴリーへと展開してゆき、さいごにもつとも具体的なものへと上向してゆく方法は、たとへそこで挙げられている単純な諸カテゴリーのとり方やさいごに到達するより具体的なカテゴリーの設定のしかたなどについて多くの疑問をのこすとはいへ、⁽²⁾ 基本的には「科学的に正しい方法」を示しているのである。これとの関連でみると、したがつて、これにさきだつ二つの節の論述は、第三節においてかようなかたちで「経済学の諸体系」を正しく説明してゆくための序節であつて、なканずく経済学の「出発点」に配置されるべきカテゴリーの観点からみた「経済学批判」であるといふことができる。さらに詳しくいえば、古典経済学者たちがそこからときおこしている「個々ばらばらの」個人的生産や、たんなる「生産論」を、経済学の基礎あるいは始発点として配置する安易な立場を批判することによつて、第三節での単純な諸規定を出発点に配する正しい立場を準備したとみることができないかとおもわれる。かようにして、第三節の末尾に位する有名な序説プランの第一項目においては、「一般的抽象的な諸規定、したがつて多かれ少なかれすべての社会形態に、ただし右に説明したいみでみられる諸規定」という文言があたえられることとなり、いちおうさきの両節で記された「生産一般」にかんするものは、このプラン項目からは排除されることになつて⁽³⁾いる。というよりは、「生産一般」にかんれんする諸分析や諸命題は、経済学体系の一般的前提ではあつても、それじたいがひとつのまとまつた項目を経済学体系の編別構成のうちにもつものではないとされて⁽⁴⁾いるわけである。

- (1) 宇野弘藏教授記念論集『マルクス経済学体系』上巻所収の拙稿では、この関連性についてひとつの解釈をのべておいた。すなわちマルクスが単純なカテゴリーとしてあげているもののうち、「労働」、「分業」、「欲望」のようないわば一般的概念はむしろ「生産一般」にぞくする概念であつて、経済学の出発点としては適當ではない、にもかかわらずマルクスがこれらを、「交換価値」や「価値」と同列においたのは、第一、二節にのべたところから影響をうけたのではないかと。(同書、二二〇ページ)だが、マ

ルクスにおいては、さきの諸カテゴリーはそれじたい単純な超歴史的なものではあるが、しかし抽象的な規定性は「まさにその抽象性のゆえに」ブルジョア社会の内部でのみ認識されうるものであり、したがってブルジョア的なものに発展してゆく要因をそれじしんにそなえているものと、考えられていたのである。したがって、一方では本文のようにみることもできるだろう。

(3) (2) 前掲、『価値論の研究』所収、『経済学の方法について』を参照。

この点は第一節にふくまれるつぎのような章句からみて明らかであろう。たとえば「スミスやリカードがそこから説きおこしている個々ばらばらの獵師や漁夫は、一八世紀の、空想をまじえない想像のうんだものである。」「スミスやリカードがまつたくその影響のもとにあつた一八世紀の予言者たちは、こうした一八世紀の個人——一方では封建的な社会形態の解体の、他方では一六世紀このかた新しく発展した生産諸力の産物——を、過去に、實在したかのごとく考えて、理想として思いうかべていたのである。」あるいは「社会の外部での個別化された個々人の生産ということとは、……ひとつのパラドックスである。……一八世紀のひとつとは意味をもつていたこのあさはかな考えが、バステイア、ケアリ、ブルードンなどによつて大まじめにふたたび最近の経済学のただなかにひきいれられさえしなかつたら、まつたくこの点にふれる必要がなかつたであろう。」なお Grundrisse, S. 74 参照。さらに第一節後半の「総論」としての「生産論」（たとえば J・S・ミルに代表される生産論）にたいするマルクスの批判を参照。

(4) Grundrisse, S. 28-29.

(5) 序説プランの全文は省略するが、これを見るとそのなかでは「生産一般」にかんする諸範疇は、ブルジョア的な「エーテル」にそめられてふたたびあらわれてくる。たとえば賃労働者、土地所有、交換、流通などは、マルクスの考えではそういう扱いをうけているものであろう。

そうするとマルクスは、『序説』において「生産一般」論を論じているが、それは「経済学の方法」にたいするたんなる導入部としてとりあげたにすぎず、『綱要』本論の敘述はこれをもつば第三節の「経済学の方法」にもとづいておこなつたのだとみることができよう。しかるにマルクスは、『綱要』本文の敘述をすすめてゆくうちにふたたび「生産一般」にたいする指摘や言及をなしているのであつて、われわれは、マルクスが一たん不明確なたちではあるが、すくなくとも経済学体系プランのうえではこれを排除している關係上、すくなくから奇異の感に迫られるのである。

三

周知のように『綱要』は、マルクスの表題にしたがつて、『序説』、『貨幣の章』、『資本の章』および附録から構成され、それらはおよそマルクスのノートにもとづいて執筆順の配列をとっている。しかし内容的にみると、大体において『序説』から『交換価値の章』、『貨幣の章』、『資本としての貨幣の章』、『資本の章』という順序になつてゐる。

そこでまず『交換価値の章』についてみると、そこには直接的にあるいは明示的に「生産一般」にかんする言及はみあたらないけれども、われわれはしばしば「生産物（あるいは活動）が商品に、商品が交換価値に、交換価値が貨幣になる」という「フレーズ」におつかる。たとえば、

「したがつて、過程はかんたんにつきのようになる。つまり、生産物が商品になる、すなわち、交換のたんなる契機となる。商品は交換価値に転化される。商品を交換価値としての自分自身に等置するために、商品は交換価値そのものとしての商品を代表している章標ととりかえられる。ついで商品は、かように象徴となつてゐる交換価値として、ふたたび他のいずれの商品とも一定の割合で交換される。……商品の交換価値は、物質的に商品から分離した存在をうけとる。」(Grundrisse, S. 63)

「生産物は商品となり、商品は交換価値となる。商品の交換価値は商品に内在する貨幣性質である。……生産物の現実の交換が生産物の交換価値をつくりだすように、生産物の交換価値は貨幣をつくりだす。」(Grundrisse, S. 65)

これらの章句にみられる「フレーズ」それじしんの意味内容を問うことは、ここでの問題ではない。だが、もしも右において冒頭の「生産物」という「概念」が、「生産一般」においてのみ問題となりうるような普遍的概念をいみするものとすれば、それはマルクスじしんが『序説』で設けたプランと背馳することになる。けだしその第一項目で、

「一般的・抽象的諸規定」といわれているものは、「すべての時代にたいして妥当するにかかわらず、しかもこの当の抽象という規定性の点では、まぎれもなく歴史的諸関係の産物」でなければならないからである。ところが『交換価値の章』をつうじてみられる「生産物」なる概念は、「生産物としての生産物」の意義をもつというよりは、むしろ「交換価値としての生産物」として把握されているように思われる。とくにさきにみた一連の諸概念の推論形式ではその傾向が tydよく出ているのである。ということは、マルクスによれば、この「生産物」をつくりだす「労働時間」が、たとい「特殊な労働」によつておこなわれるにしても、「一般的生産の一環として指定されるもの」とされており、したがつて「生産物」は「一般的労働」の生産物であることを予想されているからである。もちろんそうはいつても、随所に顔をだす歴史的な考察はこれを一義的に規定する妨げとなつていて、必ずしも明確とはいえないのである。だが、それはともあれ要するに「生産物」は、ここではプランの第一項での「一般的・抽象的規定」としての意味をあたえられているのであつて、『交換価値の章』に相当する部分にしばしばあらわれてくる他の諸概念、たとえば労働、欲望、交換価値などの規定もまたこれと同様なものであろう。かようにして、この章は、大体において本来のないみでの貨幣論の敘述部分とともにプラン第一項の具体的展開をふくんでみるとみてよいであらう。

しかるに、マルクスは『貨幣の章』の末尾にちかいあたりで、ふたたび経済学体系プランにたちかえりつつ、その第一篇をつぎのように規定している。

「諸交換価値、貨幣、価格が考察されるこの第一篇では、諸商品はつねに現存するものとして現われる。形態規定は単純である。われわれは諸商品が社会的生産の諸規定を表現することを知つてゐるが、しかし社会的生産そのものは前提である。しかも諸商品はこうした規定で指定されているのではない。そこで実際には最初の交換は、生産の全体をとらえずまた規定しないところの余剰の交換としてのみ現われる。それは交換価値の世界の外部にある全生産の現

存する過剰物である。それで発展した社会でもなお、このことが、直接現存する商品世界としての表面上に現われてくる。しかしながら商品世界は自己自身をつうじて、自己をのりこえて、生産関係として措定されている経済関係を指ししめす。したがって生産の内部的な仕組みが第二篇である……」

この第一篇のなかに、「生産物」や「労働」などのような『交換価値の章』において展開される「一般的・抽象的規定」のすべてが、ふくまれているかどうかは不明瞭である。だがここで注意すべき点は、「社会的生産」というものがこの第一篇の前提としてあたえられていることである。このばあいそれは、「交換価値の世界の外部に」存在するものとして、生産により媒介されていなくところの「直接的に現存する商品世界としての表面」の背後にあるものとして規定されており、まさに「生産一般」という『序説』の範疇をおもわせるに十分であろう。つまりマルクスは、この段階では「序説」プランどおりの構想のもとに、「社会的生産」一般というものが暗黙の前提としてあたえられているという立場を維持しているものとみてよい。

四

『綱要』の敘述が、『貨幣の章』から『資本としての貨幣の章』をへて『資本の章』に移つてゆくと、マルクスは、「資本の生産過程」の第一段階の展開として、「労働過程」一般の諸契機をといっている。

(A) 「内容上からみた資本の労働にたいする関係、すなわち対象化された労働の生きた労働にたいする関係——この関係においては資本は労働にたいして受身的にあらわれ、形態をあたえる活動としての労働に関連するところの特殊な実体として受働的定在なのである——この関係は、一般にはただ労働の対象性・その素材・にたいする労働の関係でありうるにすぎない、——（このことはすでに、交換価値〔にかんする〕章に先行しかつ生産一般についてとり扱わ

ければならない第一章で、論じられるべきである)——そして活動としての労働に関連しては素材は、つまり対象化された労働たる素材は、ただ二つの関係のみをもつ。すなわち原料の關係、これは労働の形態规定的な(formsetzend)合目的な活動にたいして形態喪失的な(formlos)素材でありたんなる質料である。つぎに労働、具の關係、これはそれじたい対象的な手段であつて、これによつて主体的活動は自分と対象とのあいだにおいてみずからその導体としての対象物を押し進めるのである。経済学者たちがここでもちこむ生産物という規定は、原料と労働要具とから區別された規定としては、ここではまだまったく問題にならない。それは、資本の受働的内容と活動としての労働とのあいだの過程の、結果としてあらわれるのであつて、前提としてあらわれるのではない。」(Grundrisse, S. 206)

(B) 「資本への労働の合体によつて資本は生産過程になる。だがさしあたり物質的な生産過程である。すなわち生産過程一般であり、したがつて資本の生産過程は物質的な生産過程一般から區別されていない。資本の形態規定はまったく消滅している。資本がその対象的な存在の一部を労働と交換したことによつて、その対象的な存在そのものは、対象と労働として自分のうちで分離されている。この両者の關係は、生産過程を、あるいはもつとげんみつにいえば労働過程を、形成する。これとともに、価値にさきだつて出発点として定立された労働過程——これはその抽象性のゆえに、まったくの素材性のゆえに、あらゆる生産形態にひとしく固有のものである——は、資本の内部において、たとえば、資本の素材の内部であらわれその内容を形成するところの一過程としてあらわれる。」(Grundrisse, S. 211-212)

(C) 「これまですでにみたとおり、資本はつぎのものを前提とする。(1)生産過程一般、これはすべての社会的状態にとつて固有のものであり、したがつて歴史的な性格をもたず、もしそういつてよければ、人間的な過程である。(2)流通、これはそれじたいすでにその契機 of 各々においても、またさらにその総体性においても、特定の歴史的な産物である。(3)両者の一定の統一としての資本、ところでこの一般的生产過程そのものが、資本のたんなる要素としてあら

われるにすぎなくなるやいなや、どれだけ歴史的に修正され(modifiziert)るかということは、資本の展開上であきらかにされなければならない。これは、資本の特殊的な諸区別の単純な把握から、資本の歴史的な諸前提一般があきらかにされなければならないのと同様である。」(Grundrisse, S. 226)

(D) 「生産一般に、かんずる、第一章において、交換価値一般にかんずる第二篇の第一章において、とりあげられるべき諸規定は、全展開の結果において、またその結果として、はじめてあらわれてくることができる。たとえば、われわれがすでにみたように、使用価値と交換価値の区別は、経済学それじたいにぞくするが、その使用価値というのは、リカアドオがなしたように、単純なる前提として死んだままでいるのではない。生産にかんずる章は、客観的に結果としての生産物で終わり、流通にかんずる章は、商品ではじまる、この商品はそれじたいまた使用価値と交換価値としたがつてまた両者とも異なる価値であり、両者の統一としての流通物である。」(Grundrisse, S. 226-227)

(E) 「すべてこれらは、すでに生産一般についての第一章にぞくする問題である。」(Grundrisse, S. 267)

(F) 「われわれはたつたいま資本の価値増殖過程において、それがよりまえに展開されたものとしての単純な生産過程を内蔵している次第をみた。単純な交換において生産物にたいする需要が前提されるかぎりでは、需要と供給とについても事情は同じである。生産者の(直接の)自身の欲望は、他人の需要の欲望としてあらわれる。かような展開それじたいにおいて、この展開に前提されねばならないものは、あきらかにされるべきである。そしてこの前提されたものはすべてのちに第一章にいれなければならない。」(Grundrisse, S. 311 Fussnote)

これらの章句には、「生産一般」という概念にたいにたいする当時のマルクスの考えの要点が比較的によくあらわれているのみならず、「流通一般」とか「資本一般」にたいするその語の関係も、基本的にはしめされているように考えられる。

まず右の引用句に共通してみられる点は、一見してあきらかなように、「生産一般」を全展開の「第一章」として扱うべき主張がなされていることである。それは、「出発点」として定立された生産過程であり、その「抽象性」・「素材性」のゆえにいつさいの社会形態に固有な「労働過程一般」であり、超歴史的な「人間的」過程である。ここではこの「労働過程」の分析が、いわば「即自的にみたばあいの生産」として、あますところなくおこなわれている。すなわち、「単純なる生産過程」の「三つの契機」として「原料」・「生産要具」・「労働」が、それぞれの使用価値を発揮することによつて、「ひとつの中立的な成果」つまり「生産物」をつくりだすということを軸として、抽象的で簡単な労働過程のすべての諸要素が敘述されているのである。⁽¹⁾ われわれは、『綱要の冒頭』からしばしば「生産一般」という語にみなれてきたが、その具体的な内容はここではじめて知ることができた。しかるにいまここで、マルクスはこれを理論体系の「出発点」にしなければならないというのである。⁽²⁾ さきにのべたところによれば、それは、まず最初に経済学体系の編別構成からはいちおう排除されていたが、もちろんまったく捨象されることは許されないものであつてそれゆえに、暗黙のうちに大前提として、所与のものとされていたのであつた。

マルクスがここで「生産一般について論じなければならない第一章」といつているものは、『序説』での「生産」論をさすものと思われない。内容的にみてこの想定は無理であろう。『序説』の「生産」論は、いくらか積極的な提言をふくむにしても「労働過程」の抽象的諸契機にかんする敘述に終始しているために、そこには具体的な労働過程上の諸概念たとえば労働力、労働対象、労働手段などの契機がほとんどみあたらないからである。したがつて、われわれはここに、マルクスが「資本の生産過程」の「即自的」な一過程として「労働過程一般」を問題としながら、そこに「生産一般」という一章を「価値に先行させて」、いいかえると「交換価値にかんする第二章」に先行させて設定しようとする意図をもつたことを、そしてそのかぎりでのプラン変更が企てられたことを、たしかめることができるで

あろう。しかもこの趣意は、前述(F)項にみられるように「資本の流通過程」の考察に及んでからもしばらくは同様につらぬかれているのである。

- (1) 「労働過程一般」にかんする敘述は、Grundrisse, S. 205-217 においてもつとも詳しい。なお S. 226-228 および S. 266-268、もそれぞれ参考になる。大体において『資本論』第一巻、第三篇、第五章、第一節の「労働過程」論にみられる理論内容は、ここで先駆的に素描されているとみてよいだろう。

- (2) 前後の関係からいえば、さきの『貨幣の章』末尾プランにおける「社会的生産の諸規定」がこの第一章「生産一般」としてたちあらわれてきたとみることができるといえる。

つぎに右の引用句をめぐって、マルクスがこの「生産一般」なる第一章を「資本一般」にたいしてどのような関連でとらえていたかを問題としよう。(B)項からみられるとおり、「価値にさきだつて出発点として定立された労働過程」は、「資本の内部においてふたたび、資本の素材の内部で」あらわれてきて、資本の「内容」を形成する。つまりそれは、資本の生産過程における物質的基礎を形成するわけであるが、しかし「資本のたんなる要素」として資本に包摂されるやいなや、それはとうぜんのこととして「歴史的に修正」されて、特殊な形態規定性をうけとることになる。かくして、「資本はその素材的側面からみれば、単純なる生産過程としてみられている。だがこの過程は、形態規定性の側面からみれば自己増殖過程である。」(Grundrisse, S. 217)だがこのような「歴史的修正」とは、なにも「生産一般」にかぎつていえることではなく、「流通一般」についても多かれ少なかれいえることなのである。たとえばさきの(C)項では、「その各々の契機においてもその総体性においても特定の歴史的産物」である流通は、資本概念のうちに統一される、すなわち、「資本の歴史的な諸前提一般」たる流通は、「資本の展開上」において「資本の特殊な諸区別の単純なる把握」からあきらかにされなければならない、とのべられている。同じような趣旨は、より一般的な私たちではあるが、(F)にもあきらかである。ここでは、「展開それじたいにおいて、その展開に前提されねばならぬも

のは、あきらかにされるべきである。そしてこの前提されたものは、すべてのちに、第一章にいれなければならない」とある。したがって両者を綜合すると、「資本概念を形成する」二つの主要な契機は、流通と生産とによつてあたえられることになる。

③「資本概念の形成において展開さるべき第三の契機は、労働に対立するところの原始的蓄積であり、したがつてさらには、蓄積に対立するところの対象性をもたない労働である。第一の契機は、流通から生じてくるものとしての価値、流通を前提するものとしての価値から出発した。それは資本の単純な概念であつた、直接に資本へと規定されていくような貨幣であつた。第二の契機は、生産の前提でありかつ生産の結果であるものとしての資本から出発した。第三の契機は、資本をば流通と生産との一定の統一として措定する。」(Grundrisse, S. 225-S. 226)

「資本は、生産物と貨幣との、あるいはより適切には生産と流通との、直接的統一である。かようにして資本は、ふたたびそれじたい直接的なものである。そしてその展開は、規定された・だから単純な・関係として措定されいるところのかような統一として、自分自身を措定しかつ止揚する点に、なりたつのである。その統一は、さしあたり資本においてなにか単純なものとしてあらわれる。」(Grundrisse, S. 236)

これらの文言からも、右にのべたような関連はいつそう明白であろう。すなわち、「資本概念」は、さしあたり、「生産」と「流通」との「直接的な統一」として形成されるのである。もつともそうはいつても、この二契機を自己のうちに包摂するだけで十分だとはいえない。マルクスが資本概念を形成する「第三契機」をあげて、それを「労働に対立する本源的蓄積」だとしていることは、このばあいきわめて示唆的であるし、また、このように『綱要』での『資本の章』の敘述がすすむにつれて「資本概念」がさまざまな規定をうけてゆくことも、とうぜんであろう。だからここでは、やがて豊富な具体的内容を自己のうちにとりいれて十分な「資本概念」に到達すべきものの原初的な規定が、

あたえられているとみるべきであろう。「資本一般」という完全な概念を展開すべき出発点としての、「単純な」・したがって「直接的な」・統一が、あたえられているのである。「さしあたり」といつているのもこの意味であろう。ともあれ、この段階での「資本概念」は「生産一般」と「流通一般」との二契機を蔵していること、逆にいえば前提としてあたえられた「生産一般」と「流通一般」とは「資本」においてふたたび統一的存在を与える、すなわち一般的にいえば、資本の展開それじたいのうちに、「前提されたものがあきらかにされてゆく」ということ、こうした論旨をわれわれはつかみとることができるのである。

ただこのばあい、右にみたように「生産一般」から「流通一般」へ、そしてさらに後者が「資本一般」へと展開してゆくかたちが、どのようなものであるかという点になると、マルクスにおいては、こうした三者の移行関係がきわめて不明確のままにとどまっているとしかいいないであろう。もつとも「流通一般」から「資本一般」への移行は、『綱要』では『貨幣の章』の末尾に近い部分および『貨幣の資本への転化の章』において、内容的には貨幣の資本への転化というかたちで説明をあたえられている。だが、「生産一般」から「流通一般」への移行の問題については、マルクスの筆がほとんどふれていない。「生産一般」というものが、「資本の生産過程」の第一の契機として展開されるためには、たんなる「前提」としてあたえられるのではなく、さらにすすんで「第一章」としての地位をあたえられて理論的展開の「出発点」とされなければならないというのならば、この移行の問題はけつして無視することのできぬ重要性をもつはずである。さきの(D)項でマルクスはこの点に多少ふれているが、もちろんこれは十分とはいえない。すなわち、そこでは、「生産一般」にかんする第一章でも、「流通」〔交換価値一般〕にかんする第二篇の第一章でも、いくつかの規定は、全展開の結果としてはじめてあらわれてくることが強調され、これをたとえば、「生産にかんする章は、客観的に結果としての生産物でおわり、流通にかんする章は、商品ではじまる、この商品はそれじたい、また使

用、価値と交換価値（したがつてまた両者とも異なる価値）であり、両者の統一としての流通物である。——だがこの統一は、たんに形式的なものにすぎないのであつて、だから経済外的な、たんなる消費対象および自立化した貨幣としての交換価値としての商品に、一致する。」（Grundrisse, S. 227）というふうに説明している。

このような説明は、はたして「生産」から「流通」への移行条件を明確にしているといえるだろうか。すくなくとも『貨幣の資本への転化』の過程を具体的内容とする「流通」の「資本」への移行に相応するようなものを、ここであきらかにしているとはいえないであらう。

（1）「生産の章」は「生産物でおわり」、「流通の章」は「商品」ではじまるというマルクスのことばは、「交換価値の章」での「生産物——商品——交換価値——貨幣」というフレーズを思い起させる。「生産の章」の結果として出てきた「生産物」は「流通の章」の「商品」と、こういうかたちで結びつくのではないか、とも思われてくる。だが、実質的内容からみると、このフレーズで「生産物」といわれているものは「商品」とおなじものである。

ところで『綱要』の末尾（第七ノートの末尾）には、「（1）価値」という表題をもつ短い一文がみえている。周知のよう
にここでは、「ブルジョアの富が表示される第一の範疇である」という冒頭の句から始つて、大体において商品範疇を使用価値と価値との二重性でとらえる立場が確立されているとみてよい。編輯者は、「商品にかんする章のために」という欄外見出しをつけている。一八五八年三月十一日附のマルクスからラッサールへの手紙においても、また一八五八年六月上旬の「第一草案」においても、「（1）価値、（2）貨幣、（3）資本一般」という表現にとどまつており、まだ「第一章、商品」という明確な表現はとられていない。これが登場するのは、一八五八年十一月二十九日附のマルクスのエンゲルスへの手紙においてであらう。すなわち、

「さいごに、第一篇がさらに大きくなつた。というのは、初めの二章、すなわち草案にはぜんぜん書いてなかつた第一章、商品と、きめて簡単な概略しか書いてなかつた第二章、貨幣または単紙な流通とが、はじめにもくるんだより

もふえんされたからだ。」⁽¹⁾

ここではマルクスの、「草案にはぜんぜん書いてなかつた第一章、商品」(傍点筆者)という句が注目される。だがそれはともかくとしても、「第一章、商品」が明示的に配置され、しかもこれが「第二章、貨幣または単純な流通」とともに、「若干の序章」としてひとまとめにくくられて、「第一篇、資本一般」という包括的な冒頭の篇にふくまれることになっている点は、みのがせない事実であろう。これ以後現行『資本論』にいたるまで、始章にかんする扱い方のうえでの変化は、根本的にはないといつてよい。

かようにみてくると、あきらかにさきにみた「生産一般」を第一章に配する立場は、『綱要』の敘述のおわりの部分にいたつてまったく放棄され、そのかわりに「流通一般」のうちに含まれる「交換価値の章」および「貨幣の章」とはそれぞれ「商品」および「貨幣または単純なる流通」を論ずる「序章」として、いまや「資本一般」という「第一篇」に組みかえられたことが、知られるのである。この編別変更の事情がどういう理由にもとづくものであれ、すくなくとも資料上は、当初の経済学体系プランの第一項は、こうして欠落してゆくのである。

註

一八五八年二月二二日附のマルクスのラッサールへの手紙において、はじめて商品論、貨幣論は「資本一般」のうちに編入される。すなわち「全体は大部に分れている。——資本について(若干の序章をふくむ。……)いうまでもなくここで「序章」といわれているものの内容は、『序説』のプランの第一項目および「貨幣の章」の末尾の五部門総括プランの第一項目に相当するものであるが、より正確にいえば「(1)価値、(2)貨幣」の二つの章をさすわけである。しかし、一八五八年一月二九日付のマルクスのエンゲルス宛の手紙および一八五九年一月二五日付(?)の手紙では、第一章商品となっており、第二章とともに「資本一般」に編入されている。後者の手紙にいわく「原稿は、およそ一二印刷ボーゲン(三ヘフテ)だ。そして——おどろくなかれ、——「資本一般」という表題にもかかわらず、これらのヘフテは、また資本については何も含んでおらず、ただ二つの章、1商品、2貨幣または単純な流通、を含むだけだ。」(『資本論にかんする手紙』岡崎訳、上巻、九四ページ)。

(1)『資本論にかんする手紙』岡崎訳、上巻、九三ページ。

五

以上では、主として素材的側面を中心に、マルクスの経済学体系プランにおける始章の取り扱い上の変遷を辿ってきた。要約的にいえば、当初の構想で第一分肢におかれていたものの主たる内容は、やや複雑な経緯のち、けつきよくそのまま端緒の部分として保持され、たんなる「序章」として独立の冒頭項目をなす位置から、資本の生産過程の第一篇に編入されることとなった、というわけである。はたしてこれが事実であるとするならば、第一にそれはいかなる理由にもとづくものであるのか、また第二には、いつたいこのことは経済学体系化のうえでどういう意味をもつのか、ということがつきに問われるべき課題であろう。ところがこの第一の問題は、きわめて困難な問題であつて、マルクスの敘述のうちに明確な答えを期待することはできないようである。それは、ひとつには『綱要』のなかでかれじしんがこの点に直接ふれていないからであり、またかりに言及しているにしても別のことばで間接的に語っているかもしれないからである。だが従来プラン問題の研究史上こうした問題はあまり顧られなかつただけに、それを解決にみちびくべきおおよその見透しをあたえることは、あながち無駄ではないであろう。第二の問題は、おのずから明らかなように、これまでのべてきたことにたいするいちおうの総括である。

ところで、右の第一の課題を解明する手掛りとしては、原始的蓄積過程にかんする敘述がある。ふたたび素材上の觀察にもどるが、『綱要』の展開のなかでこの原蓄論がどうかたちで論じられているかということからはじめたいとおもう。しかし原蓄論そのものをここでは詳論できない。本稿のテーマに関係するかぎりにおいては、それはマルクスがどういうかたちで、当初の経済学体系プランに全くみられないこの議論を、理論体系のなかへととりいれてくるかという視点にしぼつて、考えてゆくべきである。すでにみたように、『序説』では「土地所有」に理論的展開の出発

『経済学批判綱要』における「生産一般」についての考察 石垣

点をもとめる方法的見地が批判されており、歴史的な順序で経済学的諸範疇を展開することは不可能であることが明示されていた。⁽¹⁾しかるに行論上では、しばしば歴史的な範疇としての、土地所有とか商人資本にかんする論述がおこなわれているのであり、なかならず流通一般を扱った諸領域ではそういう傾向がかなり明瞭にあらわれている。『資本にかんする章』もこの例外ではない。それならばいつたいこういう歴史的諸関係や諸範疇への言及はどういうかたちでなされているのであろうか。マルクスは「貨幣から資本への転化の諸条件」のところで、つぎのようにいつている。「理論上では in der Theorie 価値の概念は資本のそれに先行するが、しかし他方ではまた価値の純粹な発展のためには資本にもとづく生産様式を前提とするならば、同じことが實際上でも in der Praxis 生ずる。……その純粹性と一般性における価値の存在は、個々の生産物が生産者一般のための、またなおいつそのこと個々の労働者のための、生産物であることをやめ、そして流通による実現なしには意味をなさないというような一生産様式を前提とする。……したがって、かような価値規定そのものは、社会的生産様式の一定の歴史的段階をその前提にもつのである、またそれじたいこの生産様式とともにあたえられた・それゆえに歴史的な・関係なのである。

他方において、価値規定の個々の契機は、社会の歴史的な生産過程のより以前の諸段階で発展し、かつその生産過程の成果としてあらわれる。

だから、ブルジョア社会の組織の内部では、価値のつぎに直接に資本がくる。歴史上では、不完全な価値発展の物質的基礎をなすところの他の諸体系が生ずる。⁽²⁾」

「封建的な地主の地代生活者への、世襲的な半隷属の・また往々にして不自由な・終身小作人の近代的農業家への、また土地に緊縛された隷農や賦役農民の農業日雇労働者への、漸次的な転化がしめすところの土地所有の歴史は、実際ににおいて近代的資本の形成の歴史であろう。……だがここでわれわれが問題にするのは、すでに形成された自分自

身の基礎のうえで自己運動するブルジョア社会なのである。」

これらの引用句によると、価値の概念が資本の概念に先行することは、理論的にも歴史的にもいえることである。しかし価値概念の個々の契機は、たしかに近代以前の諸歴史的社会にあつても発展するが、その純粋性と一般性においてそれが発展しうるのは、資本家的生産様式の基礎上的においてのみである。だがこれは、すでにマルクスが『序説』の第三節「経済学の方法」でのべたところである。問題は、歴史上では不完全な価値発展の物質的基礎をなすところの他の体系があらわれる、とのべられている点にあり、それがたとえば「現実の土台」としての「土地所有関係」だという点が指摘されていることにある。そしてそれゆえに、土地所有の歴史は実際において近代的資本形成の歴史だとされている点にある。それは、すなわち現実の近代的資本の形成史が、価値から資本へという理論的發展としてではなく、土地所有の原理から資本の原理への移行というかたちをとるという意である。しかしながら、マルクスはどのように資本主義の形成史を問題としながら、「資本一般」論としては「すでに形成された・自分自身の基礎のうえで自己運動する・ブルジョア社会」だけをとり扱うものとしているのである。流通上の諸カテゴリーを論ずるのも、それはあくまでも資本概念の理論的形成の面にかざられるという前提のもとになされていることになる。

(1) Grundrisse, S. 27-28.

(2) *ibid.*, S. 163.

(3) *ibid.*, S. 164.

このようにしてマルクスは、いつたん近代的資本の歴史的形成論を觀察の範圍外に除いておきながら、他方ではこのいわば原始的蓄積過程の議論を資本概念の形成における一契機としてとりいれている。

「資本概念の形成において in der Formung des Begriffs des Kapitals 展開されるべき第三の契機は、労働に対立す

るところの原始的蓄積であり、したがつてさらには、蓄積に対立するところの対象性をもたない労働である。第一の契機は、流通から生じかつ流通を前提とするものとしての価値から出発する。それは、資本の単純な概念であつた。すなわち貨幣であつた。そしてこの貨幣は直接に資本へとさらに規定されたのである。第二の契機は、生産の前提およびその成果としての資本から出発する。第三の契機は、流通と生産との規定的統一としての資本を措定する。……しかしながら、資本が生成するためには、それは一定の蓄積を前提とする。……資本の生成のために必要なこの蓄積、したがつてすでに前提として一契機として資本の概念のなかに吸収されているところのこの蓄積は、資本として生成されてしまつている資本——そこではすでに諸資本が存在しなければならぬのだが——の蓄積とは、本質的に区別されるべきである。」(Grundrisse, S. 225-226)

ここでは明らかに、原始的蓄積過程の分析が資本概念形成の一契機としてとり扱われており、しかも第三の契機としてそのうちに包摂されている。そしてこの契機は、第一の契機たる流通と第二の契機たる生産との規定的統一としての資本を措定するものである。ところが、マルクスはこうした原蓄論にたいする言及にひきつづいて、ただちにその敘述に手をつけているわけではない。「資本の流通過程」の分析に入つてから、はじめてかれは、この敘述におよんでいるのである。

『綱要』では、周知のようにマルクスは、「資本の流通過程」の展開のはじめのほうの部分で、剰余価値の資本への転化というテーマを論じ、これによつて事実上資本蓄積論(および再生産表式論)の基本的諸命題にとき及んでいるのであるが、これとの関連で歴史的に労働や土地所有の諸形態の敘述をなしている。これは、おそらくマルクスの諸原稿のうちでさいしよにあらわれる「原始的蓄積論」と、「資本制生産に先行する諸形態」の分析であろう。後者の敘述のさいごの三分の一は、事実上前者をとり扱つたものとみてよい。内容的にみると、前者では主として労働の歴史的

な諸形態が分析の中心となつており、したがつて「対象性のない労働」の蓄積の側面が主題となつてゐるが、これに反し後者のさいごの三分の一は、どちらかといへば「貨幣財産」の蓄積の側面が主要な分析の対象となつてゐるとみることができる。

ところで、一八五八年二月二十二日付のマルクスのラッサール宛の手紙では、よく知られてゐるように、I、六部作『経済学批判』II、経済学と社会主義との批判と歴史、III、経済的諸範疇と諸関係の発展のかんたんな歴史概観というマルクス初期の著作構想がのべられてゐる。⁽¹⁾そこで、このときマルクスは原始的蓄積論を経済史の一項目として、この第三の著作に編入する考へてゐたのではないかという意見がなりたつ。⁽²⁾けれども、一八五八年六月前半執筆と想定される「第一草案」では、原蓄論は「資本の生産過程」のなかの第四項目に配されてゐる。⁽³⁾さらにまた一八五九年の三月——四月のプラン草案でも、同様の扱いをうけていて変りない。⁽⁴⁾この二つの草案に共通してゐることは、資本の生産過程での絶対的ならびに相対的剰余価値にかんする理論的展開をうけて、そのすぐあとに原蓄論が位置してゐることであつて、これは、剰余価値論で前提されてゐた労働一般を歴史的にあとから補足説明し、これによつて原蓄論につづく「賃労働と資本」との階段的関連を明らかにしようとしたものと考えられる。したがつて、『綱要』執筆当時のマルクスの考へでは、原蓄論はやはり資本概念の一契機としてとらえられてゐたとすべきであらう。マルクスが第三の著作として事実上考へてゐたものの一部としては、むしろ「資本制生産に先行する諸形態」の分析をあげなければならないとおもわれる。⁽⁵⁾

(1) 「資本論にかんする手紙」、上巻、七七ページ。

(2) 大月書店版、『資本主義的生産に先行する諸形態』の訳者ノートにおいて、手島正毅氏はこの立場をとつてゐる。すなわち、この執筆プランはそのままの形で実現されずに、結局において現行『資本論』の各分野にわたつて「系統的に分散」して敘述されることになつたとみている。(上掲訳書、一二三—一二四ページ)。

『経済学批判綱要』における「生産一般」についての考察 石垣

- (3) この草案はつぎのごときものである。I、価値、II、貨幣、III、資本一般の三つにわかれ（細部省略）、この資本一般が、さらに(1)資本の生産過程と(2)資本の流通過程とに区分される。そしてさらにこの前者が、(a)資本と労働能力との交換、(b)絶対的剰余価値(c)相対的剰余価値、(d)原始的蓄積（資本と賃労働の関係の諸前提）、(e)取得法則の顛倒、この五項目をふくんでゐる。Grundrisse S. 855-859. を参照せよ。

- (4) この草案の大綱はつぎのごとし。I 資本の生産過程。(1)貨幣の資本への転化、(2)絶対的剰余価値、(3)相対的剰余価値、(4)原始的蓄積、(5)賃労働と資本、以下省略。Grundrisse S. 969-974. を参照せよ。

- (5) 手島氏は、『先行諸形態』だけをとりあげていて、「原蓄論」のほうは考えておられないので、その点にも問題はある。

要するにマルクスの構想は、おおよそつぎのような点にあつたのではなからうか。すなわち、マルクスにおいては剰余価値の両形態に明確な規定をあたえたあと、資本と賃労働との階級的関係をいつそう明確にするためには、歴史的な過程としての原蓄論によつて資本対労働の歴史的諸前提を明らかにしめる必要が生じ、これをつうじて「商品生産」の「領有関係」と資本主義完成期の「取得法則」との比較検討のうえに、いかにして「取得法則の変転」が生じたかを説こうとしたものではないかということである。だが、それはともかくとして、こうして「対象性なき労働」というかたちでの労働一般が資本主義の形成過程で具体的に創出されてくるということ、そして資本主義の歴史的発展じしんがこのような資本蓄積と労働一般を措定してゆくということは、ここでマルクスをして、抽象的な「生産一般」論における種々の契機を排除させる一因となつたとみることはいふまでもないであらうか。のちにみるように、『序説』において「従来の経済学」の方法的出発点を批判した態度は、むしろここでも貫徹されているものといえる。けだし「生産一般」から出発する方法意識に組みするとすれば、それは「従来の経済学」と同一水準に墮してしまうからである。しかるにマルクスは、『綱要』の展開中にしばしば「生産一般」を方法的出発点とする立場にまよいこんで、この立場を認めるかのようなことばを断片的に記しているのであつた。けれどもかれは、結局において少なくとも表面上は、右のような資本形成の歴史的過程の分析を契機として、こうした非歴史的立場を排棄したのである。それとい

うのも原始的蓄積過程の分析という歴史的観点の導入は、「従来の経済学」のいのように手をふれていない、マルクス独自の功績に帰すべき未開拓の仕事であつて、これによつて古典経済学の克服は、さらにいつそう確かなものになつていつたからである。

ところで、こうした「原蓄論」なり「土地所有論」なりは、その個々の内容がやがて分散配置されて、『資本論』のいくつかの篇にたいする歴史的補遺のようなかたちに転化される、このことはあらためて指摘するまでもなく明らかな事実であらう。しかし、マルクスが原蓄論を『綱要』の範囲内で資本の第三の契機として把握していることじたいは、『資本論』というより完成した体系からみると、まったく不可解だといわなければならぬ。したがつてこのようなプランの変更は、マルクスにおける方法意識上のいちじるしい進歩をものがたるものとみてよいであらう。すなわち、「資本論」の段階になると、「生産一般」にかんする論述にかぎらず「資本主義成立史」としての「原始的蓄積」論もともどもに範疇展開の大前提として暗黙のうちに設定される性質のものとなり、理論展開そのもののうちでふたび措定されることになる。前者は資本の生産過程における「労働過程」論として、後者は資本蓄積にたいする歴史的補足として、それぞれ特殊な資本主義社会の原理的体系のうちに論証されうようなかたちをうけとる。もともと「生産一般」論も「原始的蓄積論」も、それじたいとしては自明のことでありながらじつはまだ科学的論証をあたえられていないのである。経済学の理論体系のうちに内的に包摂されることをつうじてのみ、これらのものは科学的証明をえられるであらう。マルクスが『経済学批判』の「序言」のうちで、「これから証明していこうとする結論をさき廻りして述べるようなことは何でも邪魔になる」といつているのは、このことにたいする科学的反省から出たものである。またそこで「個別的なものから一般的なものへとよじのぼる」といつていることばも、特殊な資本家的社会の法則論としての「個別」から、逆にこの法則論に前提されていたところの「特殊」としての歴史的な発展論

『経済学批判綱要』における「生産一般」についての考察 石垣

(たとえば原蓄過程論、一般的には唯物史観的諸法則)や、経済原則論としての「一般」(たとえば「生産一般」)を論証してこうとする立場を、いみしているものとおもわれる。

経済学体系序章の冒頭に「価値」という項目を配置する立場が、『綱要』末尾になつて明確なかたちとなるのは、むしろ「生産一般」や「生産物」などを出発点としたり、あるいは「流通一般」を漠然と始原におく立場に比し、理論体系化上のめざましい進歩をしめすものである。しかもすでにそこでは、内容的には使用価値と価値との統一としての商品が事実上とりあげられており、この点『資本論』の冒頭の商品論をおもわせるに十分である。だが、それにもかかわらず、そこにおいて、まず「使用価値」を論じ、これにつづいて「交換価値」をとり扱う順序は、さきにも「生産一般」を理論展開の出発点とする立場の反映であつて、われわれはこの点にマルクスがいまだ十分にブルードン主義や古典学派の諸学説を批判しえていないことを感ずる。すでにふれたとおり、古典経済学者が「政治経済学原理」の出発点を、「生産」論や「一八世紀的な個人」の交換関係や「生きた全体、つまり国家、国民」などにおいてのたにたいして、マルクスは、それがどのような意味内容をもつものであれ、ともかく「歴史的産物」としての「抽象的・一般的・規定」からはじまる理論的方法を対置させた。これが方法論的なみでの古典学派批判であることはいうまでもない。しかしマルクスは、ただ単純に古典経済学の伝統的編別構成論を否定しきつたわけではなく、歴史的観点の導入によつて(原始的蓄積論はこのいみをもつ)これを果したのであつた。すなわち、資本家の社会の経済原理の展開を、「生産一般」論からときおこすために生ずる理論的な困難をさけて、歴史的な過程をとおして創造されてくるこの社会形態の基本的諸条件を明確にとらえつつ、いちおう「流通一般」という、いかなる社会でも多かれ少なかれ存在するがしかしそれが社会の基本的構造に密着するのは資本を原理とする社会においてのみだといういみで、いわば「経済原則」と「経済法則」との双方にまたがる媒介的諸規定において開始される体系が、かためられて

くる。と同時に、こうした歴史的観点の導入は、一方では古典経済学の根本的欠陥としての非歴史性を批判する基礎をなし、他方ではいわゆるプチブル的な商品経済史観としてのブルードン主義の理論的誤謬をつく役割をはたしているとみてよい。それにもかかわらず、マルクスが『資本論』においてさえも、端緒の商品論の理論的展開に不明確な点をのこしているとなれば、やはりそれは古典経済学者やブルードンの考え方を完全に克服できなかったことの証拠とみることができよう。

一般的にいって『綱要』においては、はじめのうち生産一般↓流通一般↓資本一般という一般理論の三分肢シェーマを、さらに一般↓特殊↓個別という概念構成でとらえているようにおもわれる。内容的にみれば、そのシェーマは経済原則論から経済法則論への移行のシェーマである。マルクスは、第一項を排するかわりに第二項をとりあげて流通一般から資本一般への移行というかたちで理論体系をくみたてべく、当初のプランを変更した。これはなんでもないことのようにだが、じつはきわめて重要な問題を蔵するところであつて、さきに指摘した点だけにつきない。ただし、価値の観点からみると、それは価値の実体規定がのぞかれて価値の形態規定が出发点として強調されることをいみするからである。しかも「流通一般」がこういうかたちで確定されてくると、それはもはやたんなる「序章」というだけにとどまらず、本論の冒頭第一篇をかざるものとしての重要性をおびてくるからである。^(金等)

註

これらの点については、つぎの著書を参照されたい。鈴木鴻一郎著『価値論論争』、青木書店、(とくに八八ページ)、および鈴木鴻一郎編『貨幣論研究』、青木書店、(とくに九七ページ)。

(一九五九、五、二四)